

2022年5月29日(日)午後1時～ 西船場会館

エルス「科学と哲学の森」

健康とは何か—「ホロス」と「すくよか」

棚次正和 (京都府立医科大学名誉教授)

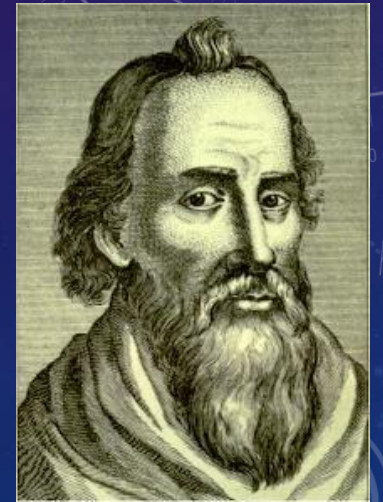
1-1 心身の健康とそれ以上の健康

- 日常の会話の中で、私たちは健康だとか、病気がちだとか、ごく自然に口にしている。人間関係を円滑に運ぶためにも、その種の話題は欠かせない。だが、「健康」の意味を厳密に考えて話をしている人は、ほとんどいないに違いない。世界医師会が採択したジュネーブ宣言(1948年)には「私の患者の健康を私の第一の関心事とする」ことを義務づけている。また、ヘルシンキ宣言(1964年)には、「人類の健康を向上させ、守ることは、医師の責務である」と明記されている。しかし、本当のところ、医療従事者、とりわけ医師は、「健康」の意味をどれほど明確に考えているのだろうか。
- 因みに、『南山堂 医学大辞典』の「健康」の項には、次のような解説がある。

「WHOは健康を<肉体的、精神的および社会的に完全に良好な状態にあることで、単に疾病または虚弱でないということではない>と定義し、さらに<及ぶ限りの最高の健康レベルを享受することは人種、宗教、政治的信条、経済的状态のいかんを問わず、すべての人間の基本的権利であり・・・>」(p.614)としているが、それは「健康の理想像」を示したものである。

1-2 「健全なる精神は健全なる身体に宿る」

- 古代ローマの風刺詩人ユウェナリス (Juvenalis, 60-128) の詩句とされる「健全なる精神は健全なる身体に宿る」は、誤訳あるいは誤用である。
- 元の言葉は、「健全なる精神が健全なる身体の中にありますように(mens sana in corpore sano → A sound mind in a sound body)、と願われるべきである」である。どんな願いがいいのか神のみぞ知ることであり、丈夫な身体でも精神は軟弱な場合も多い。それゆえ、むしろ上述のように願い、「強い心を、死を怖れない心を願え。死の間際にあつて後悔のない心を。どんな苦しみにも折れない心を。怒りにも、欲望にも打ち克てる心を。・・・」(ウィキペディア、「ユウェナリス」の項) と願うべきである、と続いている。
- この詩句から分かるのは、人間存在を少なくとも「精神と身体」の二重性で捉えていること、また「健全な」ことが取り上げられていることである。いずれにせよ、健全なことが、精神と身体という二つの領域で考えられている。ここで問題となるのは、この二領域(精神と身体)、つまり心身の関係のみで、健全なこと、あるいは健康なことを考えれば、それで十分なのか、ということである。『広辞苑』では、「健康(health)」を「身体に悪いところがなく心身がすこやかなこと」と規定しているが、「健康」は心身が良好な状態であることに尽きるのだろうか。心身の健康以上の健康があるのではないか。

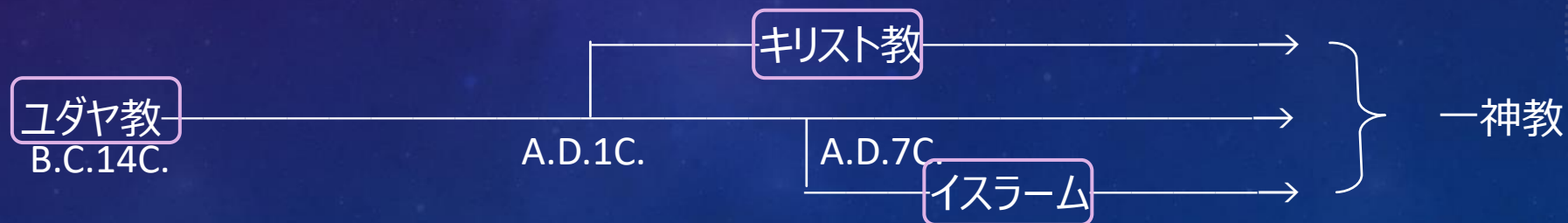


2-1 WHO憲章の「健康」定義問題（1）

- WHO(World Health Organization 世界保健機関)は、United Nations（連合国→国際連合=国連, 1945年）の下部組織であり、1948年に設立された。そのWHO憲章の前文に「健康」の定義が記されている。「健康とは完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない(Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.)」（昭和26年官報掲載の訳）と規定されている。
- この「健康」定義に対して、1998年1月の第101回WHO執行理事会で、「Health is a **dynamic** state of complete physical, mental, **spiritual** and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity. 」と改めることが論議され、投票の結果、総会の議題とすることが決まった。
- 翌1999年5月の第52回WHO総会で、健康定義改正案は、「本件のみ早急に審議する必要性が他の案件に比べ低い」などの理由で見送られ、事務局長預りとなった。その1年数カ月間に、いったい何があったのか。

2-2 WHO憲章の「健康」定義問題（2）

- 論議すべき点は、次の二点であった。第一に、健康と病気を静態的(static)に捉えるか、それとも動態的(dynamic)に捉えるかということ、第二に、人間の存在構造をphysical, mental (and social)の心身二元論的に捉えるか、それとも、physical, mental, spiritual (and social)の霊心身三元論的に捉えるかということであった。第一点は、「健康－病気」観に関わり、健康と病気を生硬な二元的対立ではなく、一つの連続体と見なすことの提案であった。第二点は、「人間の存在構造」論に関わり、心身の二元論的關係の奥にある次元を考慮することの提案であった。
- 上記の提案は、イスラーム諸国（東地中海事務局）からなされたものであり、論議が中断された背景には、**キリスト教圏とイスラーム圏との間の宗教的な「文明の衝突」**と、**近現代の西洋医学と古来からの補完代替医療との間の医学的な「文明の衝突」**があったと思われる。キリスト教とイスラームは、いずれも元々はユダヤ教の伝統に棹さしている。



2-3 宗教と医学における隠然たる「文明の衝突」

キリスト教 — ナザレのイエスをキリスト（救世主）と仰ぐ。信者数23億。
[ともにユダヤ教から派生した兄弟宗教]
イスラーム — アッラー（神）への絶対帰依。モーセ、イエス、ムハンマドは預言者、神の使徒。信者数15億。

特定地域に根づいた伝統医学 — 中国伝統医学（薬膳、漢方薬、鍼灸など）
インド伝統医学（アーユルヴェーダ、ヨーガ療法）
イスラーム伝統医学（ユーナニ医学など）

近代西洋医学 — ルネッサンス期の「病人の医学」から、近代の「病気の医学」へ転換
(18世紀後半のフランスの「臨床医学」、19世紀初頭のドイツの「研究室医学」、20世紀アメリカの「社会の医学」) ⇒ 臨床医学、基礎医学、社会医学 (= 公衆衛生学・法医学)。

2-4 幾つかの意味の断層

- **spiritual と medical の違い**

medicalの対象となるのは、mentalとphysical、つまり心と身、及び心身の相互関係である。

spiritualは、本来、完全円満なもの（大愛・大智・大和）であるから、それ自体は医療の対象とはなりえない。医療の対象となりうるのは、spiritualなものへのmentalとphysicalの関わり方の不調・不具合・不全である。

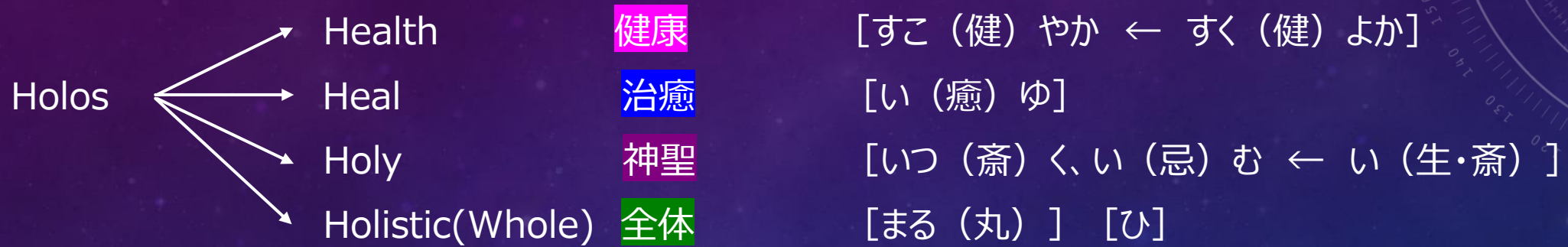
- **spiritual と mental(physical) の違い**

不生不滅の實在と、因果的に生滅する現象の違い。前者は時空人間（時間・空間・人間）を超えている次元であり、後者は時空人間の因果的な制約を受けている次元である。人は、この實在と現象の双方の次元に同時に跨がっている存在である。

- **spiritual と religious の違い**

SBNR(spiritual, but not religiousスピリチュアルだが、宗教的ではない)。特定の宗教的組織に帰属せずに、しかも自らの理想を比較的自由に探究し実現しようとしている。spiritは人が生得的に本有しているものであり、religionは教祖・教義・儀礼を持つ信仰共同体(信仰を共有する人たちの集団)を指す。

3-1 「ホロス(HOLOS)」の原像に迫る



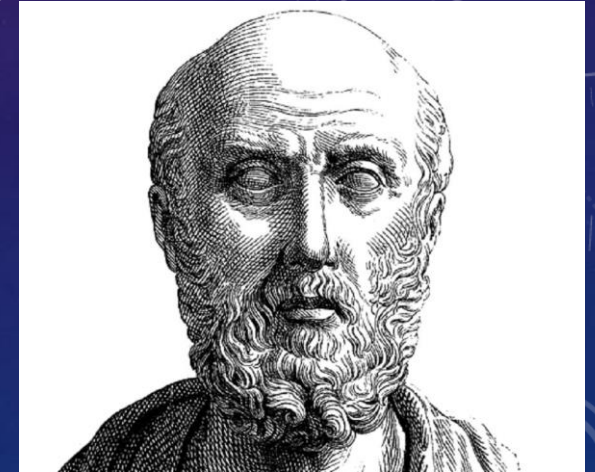
健康は治癒である	健康 = 治癒	} 健康 = 治癒 = 神聖 = 全体
健康は神聖である	健康 = 神聖	
健康は全体である	健康 = 全体	

Holosとは? ⇒ 健康であり、治癒であり、神聖であり、全体であること = 「**全きもの**」
「い」、「ひ」に近い。その象徴が「たま」。

健康の源、**治癒原理との繋がり**、**神聖の回復**、**全体(質的な完全、量的な全部)との統一**

3-2 ヒポクラテスの医学

- ヒポクラテスの誓い——アポロン、アスクレピオスなどの**医神の前で誓い**を立て、医術を授けた人を親のように敬い、自分の能力と判断力の限りを尽くして医術を実践することを約束したもの。（食養生法を施すこと。加害と不正のためではなく患者の福祉のために医業を行なうこと。他人の私事については秘密を守ること。致死薬は投与しないことなど。）
- 医聖ヒポクラテス(Hippokrates, 前460-前377)——コス島出身のアスクレピアードン（アスクレピオス神殿の周りで医療を行った医者）の一員で、病態の観察を重視する「コス学派」に属する。**食物と健康の関係についての経験知**こそ医療の起源と見なし、①観察の重視、②**全体論**または体液病理的疾患観（血液・粘液・黄胆汁・黒胆汁の不調和で病気が生じるとする四体液説）、③**自然治癒力**の重視、④予後学の重視、⑤土地・環境と健康との関係に着目（生活条件と病気の間を考慮する「体質の医学」）、⑥医の倫理（ヒポクラテスの誓い）の提唱などが、『ヒポクラテス集成』に見られる。
- 彼の治療法は、症状を自然的な反応機転の表出と見て、それを支援する方向でなされるもので、食餌療法と体育療法が基本であり、それを薬物療法で補完した。



3-3 ヒポクラテスの言葉

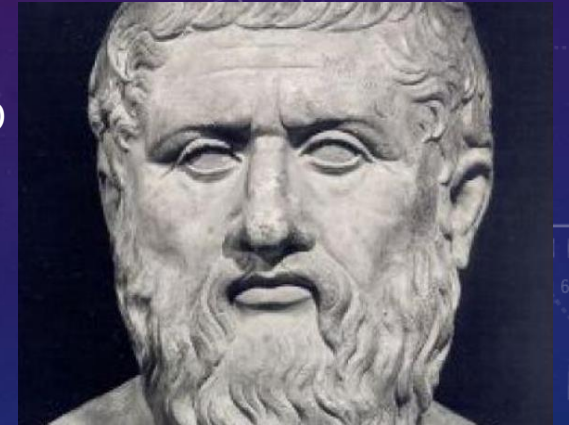
- 人は自然から遠ざかるほど病気に近づく。
- 病気は人間が自らの力をもって自然に治すものであり、医者はこれを手助けするものである。
- 月に一度、断食をすれば、病気にはならない。
- 歩くと、頭（身体）が軽くなる。
- 人は身体の中に100人の名医を持っている。その100人の名医とは自然治癒力である。
- 病気は神が治し、恩恵は人が受け取る。
- 人生は短く、芸術は長し。

3-4 プラトンの『ティマイオス』—その宇宙論と人間論(1)

- プラトン (Πλάτων 前427-前347) の対話篇『ティマイオス』

師のソクラテスは著作を残さなかったが、弟子のプラトンは幾つかの対話篇を残した。対話篇『ティマイオス』は、ソクラテスが異邦人の政治家ティマイオスらと宇宙の生成と人間の成り立ちについて哲学的談義をしたもので、有名なアトランティス沈没の話が導入部に置かれている。

常に存在するもの(ousia)は、理性の働きによって、言論の助けを借りて把握されるが、常に生成するもの(genesis)は、思惑によって感覚の助けを借りて思いなされるものとされる。この存在と生成の関係は、範型と似像の関係、つまり原因と結果の関係に等しいもので、人間を含む全宇宙の存在構造を貫いているものである。

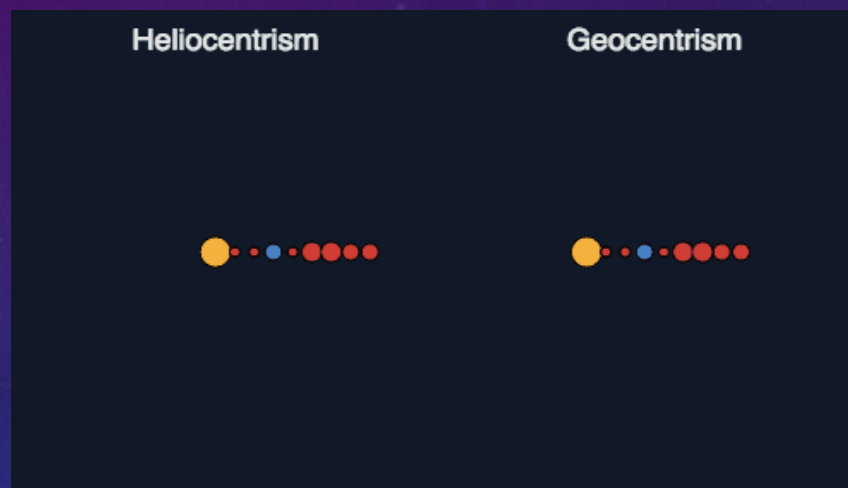


神は宇宙を「自分自身のうちに、あらん限りのすべての形を含んでいる形」としての「球形」に仕上げた。それは全ての形のうちで最も完結し、最も自分自身に相似した形であり、こうした自己完結した仕組みを持つ宇宙に最も相応しい運動は、循環運動 (periodos, 同じ場所で、それ自身の広がり範囲内で、一様に回る) である。自己完結した球形の身体の中、神は魂を置き、全体を貫いて引き延ばし、さらに外側から身体の周囲を魂で覆って、円を描いて回転する唯一の宇宙を据えつけた。

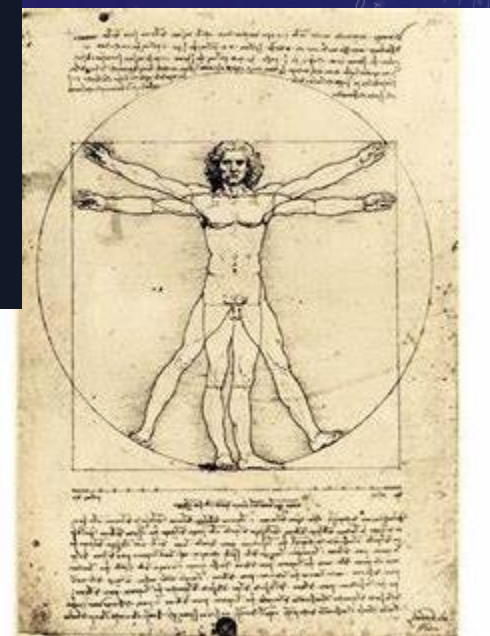
3-4 プラトンの『ティマイオス』—その宇宙論と人間論(2)

- 神的な知的制作者(デーミウルゴス)は、宇宙と人間を善きものとなるよう秩序づけて創造した。その宇宙創世と人間成立は照応しており、病気に罹った人間が本来の姿に立ち戻るためには、宇宙における天体の循環運動を観察するよう勧められる。例えば、視覚の目的は、天体(神々)の循環運動を十分に観察して、それを模倣することによって、私たちの思考の回転運動を正常なものに立て直すことにあるとされる。

地動説(コペルニクス) ← 天動説



- 身体の病気であれ、魂の病気であれ、それに応じた世話と教導が必要であり、神的な「万有の調和と回転運動に学んで矯正し、こうして観察するものを観察されるものに似せる」ことによって、最も善き生を完うせねばならないことが説かれる。



レオナルド・ダ・ヴィンチの人体図

3-5 プラトンの病気観と人体観

- **身体の病気の原因**については、①身体の四つの構成要素（火・空気・水・土）の不自然な過多や不足、または本来の場所からの移動によるか、②その構成要素から二次的に作られた組織の生成順序（血液→腱・肉→骨・髄）が逆行するか、③息や粘液や胆汁の流れの閉塞・遮断による。
- 肉（繊維素を除去された血液が凝固したもの）が溶けて腐敗物を血管に放出する時、胆汁・漿液・粘液を含んだ血液となって、正常な血液を破壊する。身体の病気で最も酷いものは、髄の実質が何かの不足や過剰によって病気になる時。

- **魂の病気**とは、理性を欠いていること（愚かさ）であり、狂気と無知の二種類がある。過度の快苦が魂には最大の病である。身体由来の魂の病気（異常な性欲、病的な気質）もあり、未調整で不具合の身体構造（酸っぱい粘液や塩辛い粘液、苦くて胆汁質の体液が身体内に閉塞する）のせいで、魂は多くの悪（意気消沈、向こう見ず、臆病、物忘れなど）を背負い込むことになる。

悪しき心身相関の指摘。

ヌース(nous)

理性

頭部

脳神経系

プシュケー(psyche)

情念(感情)

胸部

呼吸・循環器系

ソーマ (soma)

欲望

腹部

消化器系



3-6 人の存在構造の「全体(ホロス)」と健康観

人の存在構造「全体（ホロス）」という視点では、人は三重の重層構造・次元を持つ。人は三重の存在構造を持つと見るのは、人性三分説（trichotomy）である。spirit-mind-body, spiritus-anima-corporis, ruah-nephesh-guf, pneuma(nous)-psyche-soma, atman-manas-śarira, 霊-魂-体（霊-心-身）, ひ-たま-からだ

- ホメオパシのジョージ・ヴィソルカスの捉え方
身体健康とは、痛みからの解放
心（精神）の健康とは、情念からの解放
霊（霊魂）の健康とは、エゴイズムからの解放

- 神道家・本田親徳(ちかあつ)の「一霊四魂三元八力」説

直霊（なおひ）が「四魂(荒魂・和魂・幸魂・奇魂)」を統率制御しながら、四魂に分かれて働き、その働きを現象界に具現化させる質料と運動力が「三元八力」である。天津神は「四魂一霊を以て心を造り而して之を活物に賦」し、国津神は「三元八力を以て体を造り、而して之を万物に与」う、と言われる。一霊四魂(幽り・無形の天津神系)と三元八力(顕し・有形の国津神系)の両界に跨った存在が、人(霊止)であり、何よりも重視されるのは、霊を現象界に顕し出すこと、つまり「直霊の開顕」である。そのための実践として、「鎮魂」(霊魂がその本源である神霊に感合すること)と「帰神」(神懸り)の修行があり、浄心が基本となる。禊ぎと祓え。

4-1 和語「すくよか」の「すく」とは何か？

- 「すくよか」が母音交替して「すくやか」となり、そこから「すこやか」へ転じたと見られる。この形容動詞「すくよか」は、動詞「すくむ」や、副詞「すくすく」、形容詞「すくすくし」と同様に、「すく」を語幹に持っている。
- 「すくよか」は、「固さ」や「強さ」を基本とした意味・用法（心身がしっかりしているさま）であり、人の性格や体についても使われる。平安中期以降は、「生真面目さ」「無愛想」なども表わすようになり、「すくすくし」の意味に接近したと言われている。
- 「すくむ」は、「状態が固く変化する」が基本であり、身体が引きつったり、縮めて固くなること。人の心や性質にも用いられる。竦む。
- 「すくすく」は、「状態の変化や動きが勢いよく、滞りなく進む」こと。たとえば、「すくすくと育つ」。
- 「すくすくし」は、「すくよか」と同根で、固く真っ直ぐでしなやかな弾力性に欠けていることを指すが、後に生真面目さ、無愛想も意味するようになる。
- 「まっすぐ（真っ直ぐ）」の「すぐ」は、上記の「すく」と意味が重なり合っているのではないか。真っ直ぐとは、「少しも曲がっていないさま」「少しも包み隠さないこと、正直」を指す。「すぐ」とは、「まっすぐであること」、「ありのまま、正直」、「正常、普通」、「直接、じか」、「即座、そのまま」を指す。「すく」も、「すぐ」も、障りなく自然本性のままに延びる、発現するというのが意味の根幹にあると思われる。

4-2 「すく」の二面性と「清き、明き、正しき、直き」

- 「すく」の原義は「障りなく自然本性のままに延びること」と捉えられるが、それはやがて自然な成長・発現という**正の側面**と、「すくむ」などの硬直・生真面目という**負の側面**を同時に持つに至った。いわば、自然本性の即自的な発現(自ずから然る)のみならず、その自然からの逸脱という分裂の中にも巻き込まれたのである。自然からの逸脱は、結果として、自然界との対立を招いた。

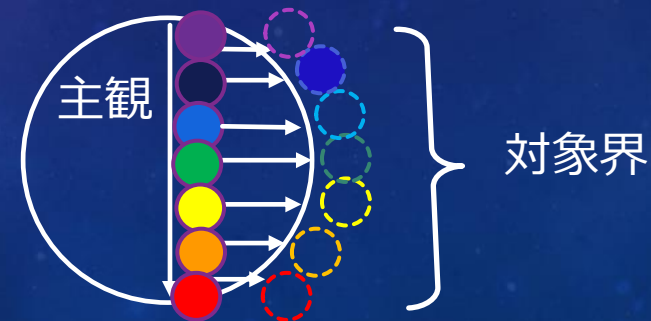


- 主客未分から主客分立・対立へ**

主客対立は、心身関係を二元的に分裂させ（心と身、頭と腹、自我と無意識など）、また対象界に関する判断でも二元的対立を作り出した。

たとえば、清き⇔汚き、明き⇔暗き、正しき⇔邪な、直き⇔曲がった、など。神道で称揚される「清き明き正しき直き」心は、身体に関しても妥当する。(主観が対象界に巻き込まれ、その二元的対立の世界を相手取ることになった。この主観と対象界の対立は、主観自身の自己喪失と表裏の関係にあるもので、対象界の二元的分裂は、実は主観自身の自己分裂の結果として招いたものである。)

- 主客分立・対立(分離・分断・分裂・孤立)から主客統合へ**



4-3 補完—「すく」の関連語？

- 「す」(接頭) — 「素」と当て字。
 - ①ただそれだけの、また、生地のままの意。
- 「すなほ(素直)」—スは接頭語。
 - ①自然のままであること。素朴。
 - ②まっすぐなこと。よこしまでなく正しいこと。
- 「すがた(姿)」—スはスナホ(直)のスに同じか。カタはきちんとした型。きちんとした恰好。
- すべ(統)る、すべて、すがすがし、すさ(荒)び、すさまじ？

- 「すぐ(直)」
 - ①まっすぐであること。曲がっていないこと。
 - ②ありのまま。正直。
 - ③正常。普通。
- 「なほ(直)し」(形)
 - ①歪んでいない。曲がっていない。
 - ②平らである。

※大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』より

4-4 主客統一の風光とそこから自由な展開

主客統合・統一の風光

叡智	(知) [過去]	
歡喜	(情) [現在]	⇒ 身口意の三業
實在	(意) [未来]	

感謝と愛と調和

- ◆ 叡智 (認識) — 感謝とは、自分の置かれた場を再認識すること
- ◆ 歡喜 (感情) — 愛とは、同じ方向を共に観ること <二等辺三角形>
- ◆ 實在 (意志) — 調和とは、部分を一つの全体(中心)に調律すること
遠心運動と求心運動が相即する

※ ヴェーダーンタ哲学のsaccidānanda

= sat(実有), cit(意識), ānanda(至福)

※ 涅槃の四徳 (常・楽・我・浄)

= 常住不変・安樂・真我・清浄





ご清聴ありがとうございました